



図書館だより

2019.4
No. 31

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-5958
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

私の体験的図書館利用法

木村 務

(学長)

新入生の皆さん入学おめでとう。大学生になってすぐにやりたいことは何でしょうか、私はまず図書館で数時間過ごすことをお勧めします。図書館オリエンテーションで図書館利用の仕方をしっかり学んだら是非授業がない時間を利用して図書館の中で過ごしてみてください。図書館にいくと真剣に読書し勉強している学生を多くみかけます。そういう場に1時間でも居合わせたら大学生としての自覚と緊張感を味わえるはずですよ。

長崎県立大学佐世保校附属図書館の蔵書量は、他大学の図書館の蔵書量と比べても決して引けをとりません。とくに経済経営系の書籍は、和文欧文に関わらず古典から新刊まで揃っており、内外の経済学者の稀少な書籍もあります。さらに新聞や雑誌あるいは電子情報も多数備えられています。大いに活用して欲しいと思います。

学生の頃、私は遊び感覚で図書館を利用していました。古典を読めといわれてもそんなに容易なことではありませんが、教科書や入門書などに書いてある有名な経済学者の言葉や数式的モデルなどがどこに書いてあるのか、原書の中に探すことはそんなに難しいことではないと思います。たとえばA・スミスの市場経済に関することばで「見えざる手」がありますが、それは『諸国民の富』という古典中の古典の書の中のどこに出てくるのでしょうか。まずは翻訳書で探し、次いで欧文原書を開いてみるのです。意外な事実を発見するか



(附属図書館を背景に)

もしれません。あるいは貿易論の「比較優位」という用語はどうか。これはD・リカードの『経済学原理』の中で説明される定理ですが、その数的モデルはどのような

もののでしょうか。訳本と欧文原書双方で調べてみてください。

こんなことはネットで調べたらあっという間に目的が達成できますが、その場合は結果を受け取ったら探求はそこで終わります。しかし、図書の中に目的の事物を発見したら、なぜそのページに書かれているのか、文脈を辿りたくなるし、著者の思考プロセスなど色々な疑問が湧いてくるでしょう。いつの間にか自分で考えているのです。図書館利用は「考える力」を養ってくれます。

もうひとつの遊び感覚的図書館利用は、まだだれも手をつけていないまっさらな本を探すことです。ずっと前のことですが、ある学生に図書館をなぜ利用しないか尋ねたところ、図書館の本は手垢で汚れているから読みたかないとの答えが返ってきたことがあります。おそらくレポートを書くために、課題図書をいやいやながら読むという経験しかないからでしょう。手垢にまみれるほど利用されている図書は手元に買い置いたほうがいいのです。

AIは過去のデータを統計的に処理して情報を提供しますので、だれもアクセスしない

情報はネット上から消えてしまいます。検索サイトに出てくる情報は、図書館の中では手垢にまみれた本のようなものです。

しかし図書館の中では、何年もの間誰も手をつけていない図書を見つけることができます。今まで誰も開いていない本を見つけて読むことは、未知の世界に踏み込む醍醐味に似ています。そこに時流に流されない「考え方」を発見することができるかもしれません。

最後に、新聞・雑誌などのジャーナルな媒体の私の経験的な利用法を紹介しましょう。

ネットには「まとめニュースサイト」がいくつも登場し、紙媒体の新聞・雑誌は不要とみる風潮も出てきました。しかし、ネット情報は、大部分がAIで整理され大多数の人に受け入れられる情報であり「受身の情報」です。

だからネット情報は決して価値判断から独立した客観的な情報とはいえません。では紙

媒体の新聞は客観的な情報でしょうか。たとえば多くの企業人が読んで「日本経済新聞」には政府や各省庁が目論んでいる施策などの情報が意図的に流されることがしばしばあり、新聞も客観的な情報源ではありません。このことはどの新聞にも共通しています。

学生の頃、私には「日本経済新聞」は文化とスポーツの紙面しか読めませんでした。それは経済・経営・法律に関する現場経験がなく、知識も乏しく社会経済に対する関心や問題意識も強くなかったからです。逆にいうと読めるようになることは、現場経験と同じように知識や問題意識が備わってきた証拠なのです。そういう意味で、新聞や雑誌は「主体的・能動的情報」であり、現場経験と同じように、実践的に社会経済に関する問題意識と知識を養う手段といえるのです。

経済学と経営学のはざままで

馬場 晋一

(経営学科講師)

本学にきて3年がたち、「経営学」という言葉の持つ文脈の広さと同時に曖昧さを感じながら、自問自答する日々が続いた。

筆者の専門分野はコーポレート・ファイナンス（企業金融）ということなのだが、これは、企業の資金および資産、財産をいかに有用な資産に変換して生産活動を行うか、そのための企業の生存基金（利潤）をいかにして集め、将来に投資（分配）するかを考える分野である。この分野のバックグラウンドは、A. フィッシャー『増価と利子』("Appreciation and Interest", 1896) および『利子論』("Theory of Interest", 1930) 『利子論』の2つ名著と、後世輝かしい業績を世に送り出すことになる「シカゴ学派」の祖、F. ナイトによる『危険・不確実性および利潤』(Risk,

Uncertainty and Profit, 1921) に遡る。

いずれも、近代経済学の歴史に輝かしい功績を残した「経済学者」によるものである。ミクロ経済学やマクロ経済学でも登場する人物であるが、コーポレート・ファイナンスでもよく出てくる。

しかし、近年、中でも「シカゴ学派」が築いた計量経済学や金融理論に対する批判は、根強い。『企業・市場・法』(the firm, the market, and the law, 1988)の著者で、経営学の世界では誰もが知るR. コースもまた、シカゴ学派の雄であったが、これらの同胞の仕事に「ブラックボード・エコノミクス（黒板経済学）」という言葉で批判したことは有名である。数式としてはエレガントに説明できているが、しかしその説明が現実の世界とはかけ離れている世界を扱っているのではないかという批判である。

経済学と経営学の世界を完全に区別することは難しい。むしろ共存の関係にあるという印象であるが、経営学的な視点で改めて経済理論を見返すと、説明される世界がいかに捨

象された世界であるかに気が付く。本質的には数式として定義しにくい要素に目を向けることをしなければ、人の生業を理解するのはむづかしくもある。

例えば「信頼」という言葉があるとする。すると経営学者は「信頼」とは何かをとことん議論して、信頼というコンセプトは計測可能かをまず考える。信頼を計測できるとしたら、たとえば「信頼」と「信用」は同じコンセプトかどうかを統計的にチェックする、定性的な世界をいかにして定量的に分析するかということをする。一部、ゲーム理論の手法で共通する理解があるとしても、多くの経済学者は、ひょっとすると、こういう分析を気持ち悪いと思うかもしれない。

よりシンプルに、数式で表せることに単純化して、証明できる段階にまでモデルに落とし込むことは、美しくもあるが、それだけで終始すると、モデルに潜んだ「気持ち」、「やさしさ」、「情熱」そういうものが消えてしまう。そういう危険を感じながら、どのように経営学の文脈で金融を説明するか、財産を捉えるかこういう視点になってくる。

その好例として、かつて、人間関係の信頼に基礎をおいた有名な研究があった。経営学の世界では有名な「ホーソン実験」である。シカゴ郊外にあるウェスタン・エレクトリック社のホーソン工場において、1924年から1932年まで行われた一連の実験と調査である。

この実験では、作業の能率は何によっても

たらされるかを実験するものであった。作業所の照明、賃金、休憩時間、軽食、温度・湿度などの定量的な条件を変えながら作業を行い、面接を行うというものであった。

しかし、これらどの定量的な条件も生産作業の能率には関係しなかった。照明実験では100ワットの照明から25ワットにまで照明量を下げ、照明と生産性の変化を観察された。そこで、多くの研究者は明るい照明にすることで生産性がアップするだろうと予測を立てていたが、実験の結果は、照明と生産性は関係しないというものであった。また、他のどの定量的な環境も作業能率とは関係がなかったのである。

その代わり、この実験で明らかになったことは、「職場の人間関係」が作業能率に関係していたということだった。その詳細は紙幅の関係上、割愛するが、個人的なメンバーの人間関係が作業能率に関係していたということだった。作業員は監督者に対しては防衛と共存の関係にあって、自然発生的に生まれる個人的な関係性が品質に反映するという結果であった。これらの人間関係は「インフォーマル・グループ」と言われ、現在の企業経営において、無視できない部分になっている。信頼や友情が生産、つまり利潤、より具体的にバランスシートと企業価値に関係するというのは、なかなか複雑なところでもある。

経済学と経営学、両者のはざまで、社会の生業を観察しながら、分析の仕方を模索してみたいと思う。

研究室の窓から — エラスムス大学 (オランダ・ロッテルダム)

山 本 裕

(国際経営学科教授)

この小論は、オランダでの在外研修中の所感について述べることにします。

エラスムスはフランダース出身で宗教改革の時代に活躍した知識人で大学人 (エラスムス著『痴愚神礼讃』(中央公論社)、ホイジンガ著『エラスムス』(筑摩書房))。その名前を冠したエラスムス大学の経済学研究院にある「都市・港湾・交通経済研究所」に半年間お世話になりました。大学には1969年に第一回ノーベル経済学賞を受賞したティンバーゲンも在籍しました (ティンバーゲン著『計



ティンバーゲン・ビルディング
16階の研究室からライン川を望んで

量経済学』(政文堂))。16階の研究室からの景色は丘や山が全くない見慣れないものですが、ライン川の支流とロッテルダムの街並みを眺めていると、しばし時間の流れを忘れてしまいます。

イギリスが世界の7つの海を制する前、この小国が世界の覇権を握った時期がありました(ウォーラステイン著『近代世界システム』(岩波書店))。VOC (Verenigde Oost-Indische Compagnie) と表記するオランダ東インド会社を中心に、イギリスなどへの中継貿易と鯨漁で富の源泉を築き、オランダが Golden Age と呼ばれた時代です(フェイル著『世界海運業小史』(日本海運集会所))、カービー他共著『ヨーロッパの北の海』(刀水書房))。インドネシアやニューアムステルダムと呼ばれたニューヨークがオランダ領であったことは知られていますが、ブラジルの一部までがオランダ領であったことを知る人は少ないでしょう。わたしが研究室をシェアしたモニカのご主人は南米のスリナム出身。同じ建物に住む大家のヤンとヴェラ夫婦は9月の中旬にカリブ海のアルバ島で遅めのバケーションを取っていました。アルバやキュラソー、そしてフランスと島を分割するセント・マーチンは今でもオランダが保有する数少ない海外自治領です(したがってオランダの表記は Netherland ではなく Netherlands)。

九州ほどの小国ではありながら、世界的な航空会社(KLM)や自国の鉄道(NS)をもち、ロッテルダム港は欧州一のコンテナの取扱量

を誇っています。また、家電のフィリップスやオイルメジャーのロイヤル・ダッチ・シェル、酪農と栽培農業も世界的にも有名で、ウェーバーが分析した資本主義の精神は現在も健在です。学生の皆さんには、かつて小野がプレーしたフェイエノールトや大学の横にスタジアムを構えるエクセルシオールなどのオランダサッカーリーグの方が有名かもしれません。

このようなオランダですが、生活はいたって質素に写ります。教員仲間で地下の大学食堂でよくランチをともしましたが、若手研究者の多くは簡単なランチボックスかパンを持参してスープだけ買っていました。食事では、少しだけ会話を楽しみますが、30分より長くなったことはありません。健康志向で、毎日16階の階段を登って研究室に戻ります(わたしの参加率は週一回)。何もお金が無いわけではありません。一人あたりのGDPは今では日本よりも1万ドルほども高くなっています。

ロッテルダムはナチスの空爆で中心部は全壊したと言われます。それでも地震の心配がなくブリック造りの建物は100年以上のものが多く残っています。わたしが住んだ5階建ての建物も築100年は超えていましたが、自宅のステュディオ(ワンルーム)は改装をかさね非常に快適でした。ブリックの建物は外からはどこで仕切られているのか分からず、巨大な長屋のようにも見えます。建物は頑健でも、部屋を仕切る壁はそれほどでもなく生活音もよく聞こえます(Coates, B., *Why the Dutch are Different*, Nicholas Brealey Publishing)。また、この国ではカーテンを閉めず、いつでも中が窺えるようにしています。テレビチャンネルは地域チャンネルを除くと国営のものが3つ。一つは教育系で、残り2つでニュースからスポーツ、娯楽までカバーしています。ゴールデンタイムの娯楽番組の多くはトーク番組が中心で、決して派手さはありません。



ゼミ生達もエラスムス大学を訪問

特質すべきは自転車です。11月の下旬からは、毎朝のように低温の中でのしとしと雨です。わたしは毎朝300メートルの斜張橋を歩いて渡って通勤しましたが、多くのオランダ人は自転車

専用レーンを、雨が降ろうが風が吹こうが、時にはみぞれや小雪でも自転車をこいでいました。中には、かなり年配のご婦人も見かけます。これだけでも、何となく勤勉さや真面目な国民性を感じさせます。ウェーバーの言う、プロテスタンティズムの倫理の末裔なのでしょう（ウェーバー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫）ほか）。

12月に入ると話題はクリスマスになりますが、学内の理容師によるとオランダ人はクリスマスのマルクト（市場）はわざわざドイツかベルギーまで行くとのことでした。本人はご主人とドイツと国境を接するオランダの

マーストリヒトとロッテルダムの隣町、ベルギーのアントワープに行くと言っていました。簡素な食事や質素な国民性は、やはりウェーバーが分析したように、来世での救済を信じて現世の仕事は Business ではなく Vocation（招命）や Beruf（天職）と考え、それに勤しむことが隣人愛につながり、結果的に金銭的にも恵まれると信じているのでしょうか。

西欧の中世から近代社会を牽引してきたのはキリスト教を中心とする普遍性ですが、オランダで現在教会に通う人々の割合はどれくらいなのでしょう（ニーチェ著『道徳の系譜学』（光文社文庫）ほか）。今日のヨーロッパ人にはウェーバーが分析した来世での救済といったニンジンもはや必要でなくなったのかもしれませんが。わたしの最大の関心事は多くの知識人と同様、5,000万もの命を奪った先の大戦の主戦場が、文明が高度に発達した欧州であったことです。宗教を必要としない現代人は「自由からも逃走」せず（フロム著『自由からの逃走』（東京創元社））これまでの戦争や紛争を教訓として、全体主義的な政治体制に陥らない社会システムを構築することができるのでしょうか？ヨーロッパにはそれを期待しつつ、アムステルダムスキポール空港をあとにしました。

古典を読む 原典に還る 2

吉居 秀樹

（元公共政策学科教授）

前号の「図書だより」で、私が学生時代に受けた教え指導から、本の内容について紹介し、古典を読むことの大切さと原典へ戻ることの必要性を記しました。今回はその続きです。

学部入学当初から私のような病弱な学生に対して親身に指導していただいた先生がありました。国際関係論の初瀬龍平先生です。初

瀬先生には、2009年にシーボルト校での学術講演会にこられたときに、遠隔授業システム上ででしたが、お会いできました。初瀬先生は1990年代にイギリスのシェフィールド大学で講義をされたこともある著名な先生ですが、その時の講話は、長崎県立大学での講演ということで、インドネシアのジャカルタ大学に招聘を受け講義をされていた経験を踏まえ、長崎出島におけるオランダ東インド会社の活動の紹介から始まりました。この時学生時代のことが懐かしく思い出されたのですが、私にとっては最も大きな影響を受けた先生でもあり、ここでも初瀬先生に受けた指導とその教材となった本について紹介したいと思い

ます。

初瀬先生は、政治学分野の先生で所属学科は違っていたのですが、G. マルチネ著『5つの共産主義』(上・下)(岩波新書 1972年)をテキストとして、先の「図書だより」で紹介した滝澤信彦先生と同じように授業終了後課外で自主ゼミを開いておられました。そのゼミに、親友となる同級生に誘われて、今から考えると無謀にも、参加しました。工業高専から進学した私にとっては、基本的な知識は全くなく、内容を理解するのは困難で、しかも体力がないものですから居眠りばかりで失礼極まりない学生であったのですが、初瀬先生には優しく受け入れていただきました。ともあれ、共産主義国といっても画一的なものではないことを知ることができました。1989年のベルリンの壁の崩壊以降、社会主義の国が次々と崩壊していくニュースを聞くにつけて、その当時の勉強のことが思い出されました。

この1年生の時のゼミの中で、ロシア革命というテーマで、三名の学生がレポートするという課題があって、思想家の系譜や影響の関係を、フローチャートとマトリクスのようなもので表して報告したときに、「吉居君、面白いね。論文で使わせてもらおう。」と言われたのが記憶に残っています。こちらが稚拙であっても、それを尊重し大切に扱っていただいた思い出です。

初瀬先生については、一年生の時の政治学の講義が特に強い印象があり、大学の教員になってからは自分の講義の中で何度かモデルとして利用させてもらってきました。それは、講義の最初に10冊の本(文庫本や新書)のタイトルが示され、その中から毎月1冊ずつ、内容についてクイズと称する小テストが行われたことです。学生は前もって指定された本を読み終えておくことが前提になりますが、1年間で10冊もの本を読み終えることができるということです。

二年生になると、先の友人を通じて大変な

課題を渡され、本格的な教育が始まりました。政治学の成績もそれほど良いものではなく、その理由は今でもわかりませんが、E.H.Carr著『Twenty Years Crisis (危機の20年)』(岩波書店)の原書を、「吉居君読んでみる」と貸していただきました。ハードカバーの厚い本で、しかも原書で、指導もなく読み始めるという状況でした。1ヶ月くらいした頃、急に、これも先の親友を通じて、「本を借りたら報告しなければだめだよ」という伝言がきました。そのときは、まだ2章までくらいしか読んでなく、仕方ないので、その友人に、読むことができた本の内容を話して、もう少し時間を下さいと返事をしました。そうしたら、内容を理解しているし、そこまで読めていたら後は読む必要がないから、すぐに返しに来なさい、という指示がありました。本を返しに行くと、口頭で質問があって、次の本が貸し出されるということが始まりました。このような教育の仕方に疑問を挟む余裕すらありませんでした。

CarrのTwenty Years Crisisは、世界的名著とされ国際関係論の古典的名著ですが、それを学ぶ上での必読書です。1919年から1939年まで、第1次世界大戦から第2次世界大戦までの20年間をテーマとして、国際政治をユートピア思想とリアリズム思想という理念的枠組みで説明していくものです。このとき教えていただいたことの一つが、中江兆民著『三酔人経綸問答』(岩波文庫)が同じ枠組みで書かれているだけでなく、Carrの書よりはるか以前に書かれているということです。ナショナリズムではなく、日本あるいは日本人についての研究をおろそかにするなという教えも受けました。ここでもやはり、一つの学問分野についての基本的な本を系統立てて読むことの必要性も教わりました。

実は、初瀬先生は、東京大学の出身ですので丸山真男氏の教育を受けた方です。ここでも先生との出会いの不思議さを感じました。何故このことに触れたかということ、三年生の

時に、丸山真男氏の若い頃の著作を集めた本（『戦中と戦後の間 1936-1957』（みすず書房）が出版されました。その中に、原書の読み方について述べられたところがあって、それは、単語の意味は辞書を引かなくても前後の関係から自ずとわかってくるという趣旨でした。その頃の私は、原書を読むスピードがあまりに遅い自分に嫌気がさして怠け心が芽生えていました。そこで、本の内容のことを、初瀬先生に話したら、「あの人（丸山氏）は天才なんだ。まねしちゃいけない。吉居君は辞書を二つ三つつぶれるくらい引くくらいして本を読みなさい」と注意されました。勉強することに早道はないということです。初瀬先生から唯一しかられた思い出です。ともかくにも、私が研究者を志し、今、一応独立して研究をできるようになった基礎を作っていた、大恩人の先生です。

結局、私は、これだけ手厚い指導を受けていながら国際関係論を専攻することなく研究者の一員になりましたが、最後に、初瀬先生から受け、そして40年以上過ぎてから現れた教育の成果についてお伝えして、終わりとします。実は、世界最初の株式会社といわれる旧オランダ東インド会社（VOC）の日本における貿易拠点があった平戸市に「1639年倉庫」（通称、「平戸オランダ商館」）が復元されたことを契機として、2013年9月に、

平戸オランダ商館の館長をされている松浦史料博物館館長の岡山さんと共に、VOCの貿易拠点のあったアジア諸都市を結んだ学術ネットワークの構築をオランダ政府に働きかけました。これは、2014年1月の平戸でのVOCネットワーク事前協議会会議を経て、2015年にインドネシアのジャカルタのオランダ大使館の中で開催された会議において、The Dutch Trading Post Heritage Networking という名の学術会議として正式に発足し、それ以降オランダ政府の支援を受けながら、毎年各国持ち回り会議が開催され研究発表がなされ現在に至っています。VOCは17世紀に世界貿易システムを構築したわけですが—これは第一次グローバリゼーションと呼ばれています—、この中で実際には何が行われてきたのかを知ることは、現在進行している、情報ネットワークシステムに支えられた第三次のグローバリゼーションの理解を深める上で意味のあることとして発意し、参加者に説明してきました。

ここに述べてきたことがらは、40数年前の学部学生時代に受けた教えが、私が現在取り組んできている情報法という領域での研究の成果と結びついて、実現可能となったということです。遅効性の学習の方が効果は長く続きしかも大きい、ということかもしれません。

情報化時代における「情報」の意味の再考

尹 清 洙

(実践経済学科准教授)

現代はビックデータ、AI、IoTなどによる産業構造の変革が世界的に進行しており、地球村は情報化時代を迎えている。ここでは、情報のルーツを辿りながらその本質とは何かについて再考してみたい。

そもそも人類に最初から言語や文字、数学や哲学があったわけではない。もちろん、図書館もあるまい。

大河の流域に人々が集まり、農業に従事し始めてから村、都市や国家が形成され、そのような組織の運営のために情報交換のツールが必要になった。

黄河文明の代表的な祖先である伏羲は自然の動きやその循環法則を陰陽の二つの元素が波動する図形として表した。八卦の誕生である。村の人々は伏羲の家の前の大きな木に刻まれた記号  を見て明日雨が降るとい

伏羲からのメッセージを受け取った。すなわち、伏羲は自然のシグナルから受け取った暗黙知に基づき、☰☷という記号を用いて「明日雨が降る」という意味情報を村の大衆に伝えたわけである。

そもそも情報というのは発信者のみでは価値をもたない。利用者が存在する時、やっ和信息は意味をもち始める。発信者と利用者が情報の交信をするためには、交信される情報に関して何らかの共通の認識ツールが必要となり、曖昧さをなくするためにはそのツールは形式論理（同一律、矛盾律、排中律）の形を取らなければならなかった。すなわち、伏羲は自然から受け取った意味情報をみんなに伝えるために、八卦という二進数の論理記号を用いて意味情報を形式化し、形式情報の形で情報を共有することを可能にした。

ここから分かるように、情報の意味が発生する動的プロセスが一段落したときに、情報の意味は、文字や記号の形で形式化され、それがマニュアルやコンピュータプログラムなどの形に固定される。そこで意味情報はやっとはじめて個別性と特殊性を離れて一般性を持つ形式情報になるわけである。すなわち、我々が一般常識で言う情報というのは、形式情報のことであり、それは本質的には論理というツールを用いて共有された、圧縮された意味情報である。

知識管理の視点からすれば、客体化された知識（形式知）とそうでないもの（暗黙知）に区別できるが、論理的能力から認識することが困難な知識が暗黙知である。

すなわち、伏羲は直感に優れただけではなく、自然から受け取った意味情報を大衆が利用可能な形式情報に変換できる知能も相当高かったことが伺える。幸い、人類はこのような先人たちの優れた暗黙知と形式知を蓄積しながら、絶え間なく文明を発展させてきた。

しかし、形式知は文字や数式などの論理や科学的手法でそのまま伝えることはできるが、暗黙知は目には見えないものであるので、先人たちが残してくれた知恵は哲学や宗教の心情で悟るしかない。我々は「以心伝心」という言葉は知識（形式知）としては知っているが、その意味情報（暗黙知）については自分の人生の旅の中で独自で咀嚼するしかない。

形式情報や知識が体系化されると学問となり、それは普遍性と確実性という強みを持っているわけであるが、他方では、創造的破壊の可能性を秘めている不確実性の意味情報を排除しようとする限界を本質的に内包している。そのため、今から1500年程前に菩提達磨は我々に次のような禅語を残してくれた。「以心伝心、不立文字」

情報化時代で実践が求められる現在だからこそ、図書館に足を運び、古典をもっと読む必要があるのではと改めて思った次第である。



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・大学閉校日など

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2019年4月26日